

## 神への盲目の愛



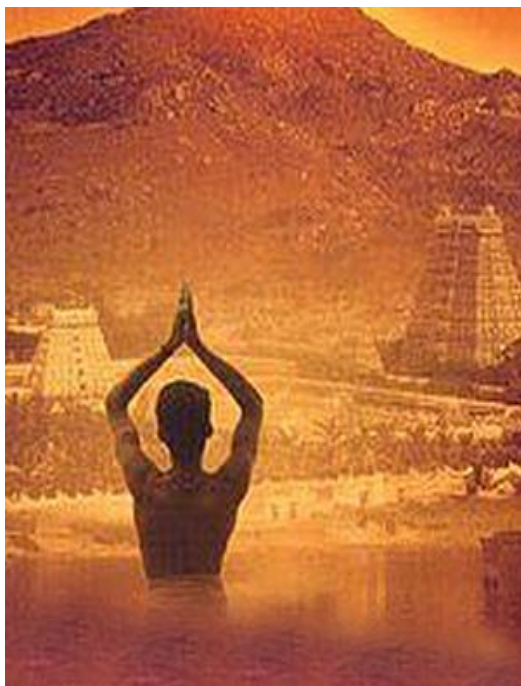
### マハーシヴァラートリのための物語

シヴァ神の偉大な信者たちの中で、大勢のインド人(特に南部出身者)の心の奥深くに刻み込まれているのは、カンナツパの物語です。この話は、カルナータカ州、アーンドラ・プラデーシュ州、タミル・ナードゥ州で、よく祖父母たちから寝物語として聞かせてもらった伝説です。その物語は、初期の頃の映画館で100日以上も上映された、『狩人 カンナツパ』というカンナダ語(カルナータカ州で話される言語)の映画にもなりました。この物語から引き出されるインスピレーションは素晴らしいものです。それはシヴァラートリだけでなく、一年中いつでも思い出す価値があります。しかし、マハーシヴァラートリに、この物語とそのメッセージを思い出すことは、実に祝福された体験となることでしょう。私たちが聞く多くの伝説の例にもれず、この物語にも様々なバージョンがあります。しかし、神に対する愛と信仰は、すべてのバージョンに共通しています。主人公は、ある部族の若い狩人であるカンナツパです。カンナツパは、今では有名なシュリ・カラハスティ・シヴァ寺院を取り囲んでいる丘に住んでいました。



シュリ・カラハスティ・シヴァ寺院—南インドでシヴァ神に捧げられる最も有名な寺院の一つ。ティルパティから 36 キロに位置する。

## 神への愛の火花が山火事となって燃えさかる



十代の頃、カンナツパは反抗的な若者でした。カンナツパは、女神を懐柔するために動物を生贄にする理由を尋ねました。彼の理屈は単純でした。胃袋を満たすために殺すことは無理からぬことであり、自然界の中でも広く行き渡っている。しかし、「目に見えない」女神のために殺すことは容認できない。実際、カンナツパは動物の生贄の代わりに、「動物的」傾向を殺すべきだと主張しました。そのような豪胆な疑問を抱いたせいで、カンナツパは部族から追い出され、カンナツパの考えに鼓舞された「従者たち」の小さな集団と共に、離れて暮らし始めました。

こんにちは、カンナツパを振り返ってみると、彼の考え方や気持ちは、私たちの最愛のスワミが常に熱心に説かれたことと完全に一致しています。動物の生贄とは、人間の中の動物性を犠牲にすることに関係しています。実際、バガヴァン ババは 1999 年 2 月 14 日のシヴァラートリの御講話で、これに関する非常に考えさせられる物語をお話しになりました。

この日、ヤグニヤ(供犠)やヤーガ(供養)の名において、山羊や羊などのような無垢で口のきけない動物たちを生贄に捧げる習慣があります。ある日、一人の高潔な人物が、大きな行列で動物たちが捕えられていることに気付きました。わけを尋ねたところ、その動物たちは生贄の祭壇に捧げられることがわかりました。その人物は動物の飼い主に、動物を生贄に捧げることでどんな利益が得られるのかを尋ねました。飼い主の答えは、この「祝福」された動物たちは神に捧げられることによって解脱を手に入れる、というものでした！

そこで、高潔なこの人物は言いました。

「ああ人よ、あなたの母、父、妻、息子、みんなが解脱を切望しています。彼らを生贄に捧げ、彼らの願いを成就させてあげてはどうですか？ 解脱の意味もわからない、罪のない動物たちの代わりに、解脱を求めている人々に解脱を授けてあげてはどうでしょう？ もし生贄になることが解脱を

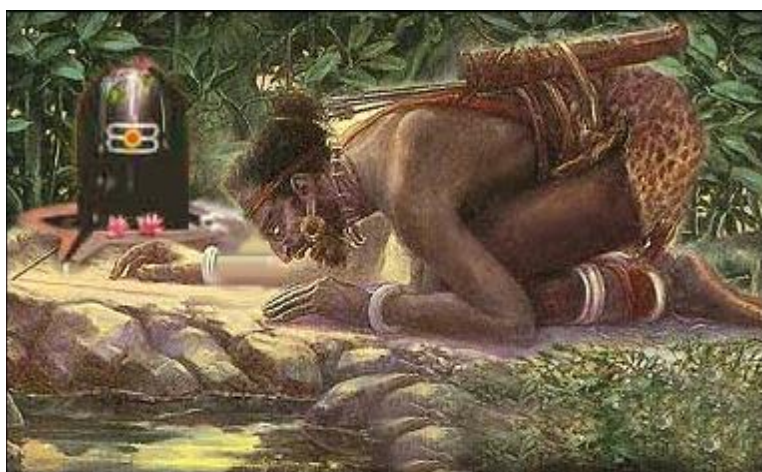
授けるとあなたが固く信じているならば、あなたの両親と、奥さんと、子供たちを生贄に捧げては  
いかがでしょうか？」

私たちのバガヴァンに関する限り、それが生贄(犠牲)の問題の解決策です。

物語を先に進めましょう。カンナツパの人生で最も重要な出来事が起こったのは、まさにこの時  
でした。カンナツパはいつもの狩りの途中で、シヴァ神の寺院を見つけました。その寺院の中に入  
った時、カンナツパは不思議な平安と静けさを味わいました。リングムに目を釘付けにしたまま立  
っていると、穏やかな至福が内側から生じ、彼の存在を通して光り輝きました。過去世における功  
徳と運命の促しが、カンナツパの中に抑えがたいシヴァ神への愛を芽吹かせました。彼より前に、  
また彼より後に、この寺院を参拝した人々は大勢いました。しかし、カンナツパはその中でも、神の  
愛に満たされて飽和状態になった、稀有な人だったのです。

その日から、カンナツパは毎日寺院にお参りするようになりました。リングムの姿をしたシヴァ神  
はカンナツパの仲間となり、親友となりました。毎晩、カンナツパは狩りを終えると寺院にやって来  
て、その日の獲物の一部をシヴァ神に捧げたものでした。要するに、彼は神聖な至聖所に生  
肉を置いたのです。

カンナツパの人生を変える  
ようになった日は、その寺院  
の僧侶にとっても彼の人生を  
変える日となりました。という  
のも、その日から毎朝、僧侶  
は寺院にやってくるたびに、  
生肉と血と葡萄酒が置かれ、  
寺院が穢されているを見る  
ことになったからです。そのよ  
うな行為に耽っている罪びと



を罵りながら、僧侶は寺院をきれいに清め、沐浴をし、礼拝のための花を捧げ、ナイヴェーディヤ  
(神様へのお供え)の果物を供えてから立ち去りました。

カンナツパは夕方や夜にやってくると、寺院に入って礼拝を始めました。彼はリングムに水を灌  
ぎたいと思いましたが、水を運んで来る手だてがありませんでした。そこで、近くを流れているスワ  
ルナムキー川から、水を口に含んで持ってきて、リングムに灌ぎました。そして、生肉と血と葡萄酒  
の捧げ物をしたものでした。



このようなことが数日間続きました。その頃、カイラーサ山では女神パールヴァティーが、シヴァ神に尋ねていました。

「主よ！ あなたは日中、あの僧侶に礼拝され、夜はこの狩人に礼拝されています。どちらがあなたにとって愛しい人なのですか？ どちらがあなたをより愛しているのですか？」

この問いに、シヴァ神はにっこりほほ笑んで答えました。

「デーヴィ！ そなたは自分の目で見るが良い」

### 「試される」時

ある朝、僧侶がリングムに真摯な礼拝を捧げ、寺院を穢す罪びとの神への冒瀆に当惑していると、驚くべきことが起こりました。リングムが目を生じ、その目が開いたのです！ これを見て、僧侶は想像を絶するほどに興奮しました。

「おお、主よ！ 私は毎日あなたのダルシヤンに与っておりますが、私を見るためにあなたが目を開いてくださるとは、これはまさしく恩寵です！ 私はなんと祝福されているのでしょうか！ なんと祝福されているのでしょうか！」

興奮した僧侶の体が踊りだすと同時に、何やら恐ろしいことが起こりました。リングムの左目が、血を流し始めたのです！ 最初はポツポツと滴り落ちていた血が、おびただしい勢いで流れ始めました。目はすっかり損傷しているように見えました。僧侶は恐怖のあまり震え上がりました。僧侶の喜びはすっかり消え失せ、これは凶兆に違いないと確信しました。こんなことが起こるのは、あの罪びとが、毎晩この寺院を冒瀆したせいだと思いました。すぐさま僧侶は寺院を飛び出し、森の中へ逃げ込んで、二度とその寺院に足を踏み入れることはありませんでした。



夜になって、カンナツパが寺院にやってきました。同じ出来事が相次いで起こりました。しかし、流血している神の目に気づいたとき、カンナツパはその激しい痛みを自分自身に感じ取って、圧倒されました。

「主よ！ あなたはここでたった一人です。いったい誰があなたの看病をするのですか？ どうか私をここにとどまらせ、あなたが健康を取り戻すまで看病させてください」

そう言いながら、カンナツパは森の中に入って、出血している目に塗るための薬草を採って来ました。

血は激しく流れ続けていたため、カンナツパのあらゆる努力は無駄に終わりました。

そこで、カンナツパは自分の矢で、自分の一つの目を抉り出し、それをシヴァリングムの出血している目の上に置きました。これは、偉大な勇気、至高の信愛、そして原始的な移植手術、と考えるまでも差し支えないでしょう。おかげでリングムの目の出血は止まり、カンナツパは大喜びしました。

しかし、カンナツパの喜びは長続きしませんでした。その後すぐ、神のもう一方の目が出血し始めたのです！ 突如として、カンナツパにとっては厄介なことになりました。いいえ！ カンナツパは自分のもう一つの目を差し出すのをためらったのではありません。もし、もう一つの目を取り出せば、彼は完全な盲目となり、リングムの出血しているもう一つの目の上に、自分のもう一つの目を置く正確な場所がわからなくなると思ったのです。そこで、カンナツパは出血している目の場所に、自分の大きな足のつま先を置き、それから自分のもう一つの目を突き刺すために、矢を取り出そうとしました。そのとき、シヴァ神が姿を現し、カンナツパが自分自身を盲目にするのを止めさせました。

言うまでもなく、カンナツパは身も心も魂も完全に健康でした。その日から、カンナツパはナーヤンマール聖者として礼拝されています。

### 神はバーヴァプリヤ（気持ちを喜ぶ者）

スワミは、神はバーヴァプリヤであってバーヤプリヤではない、と何度も強調されてきました。これは、神は気持ちを喜ぶ者であって、うわべの装いに関心を持つ者ではない、という意味に解釈できます。僧侶と狩人は、共に神にとっては等しく愛しい人でした。だからこそ神は両者に同じように神自身を現わしました！ しかし、野蛮で、神聖を穢す狩人のほうが、明らかに神に対する大きな愛を持っていたのです！ 狩人は、神のためなら自分の目を差し出す覚悟がありました。彼の神は、彼自身よりも大切だったのです。

信愛とは、礼拝を執り行ったり、神に花を捧げたりすることではありません。礼拝はただ良い行為であるに過ぎません。人は心の内に良い思いを持つべきです。悪い意図を持って良い行為を始めても、自分を救うことはできないでしょう。たとえば、誰かが慈善的な理由で10ラーク(100万ルピー)の寄付をすれば、別の人には世間の注目を集めるためだけに、15ラーク(150万ルピー)の寄付を申し出るかもしれません。本当は、その人は10ルピーすら寄付をしていないのです。その

ような人々は、演壇では英雄(ヒーロー)ですが、実践では取るに足りない人(零:ゼーロー)です。思いと言葉と行動は一致しているべきです。

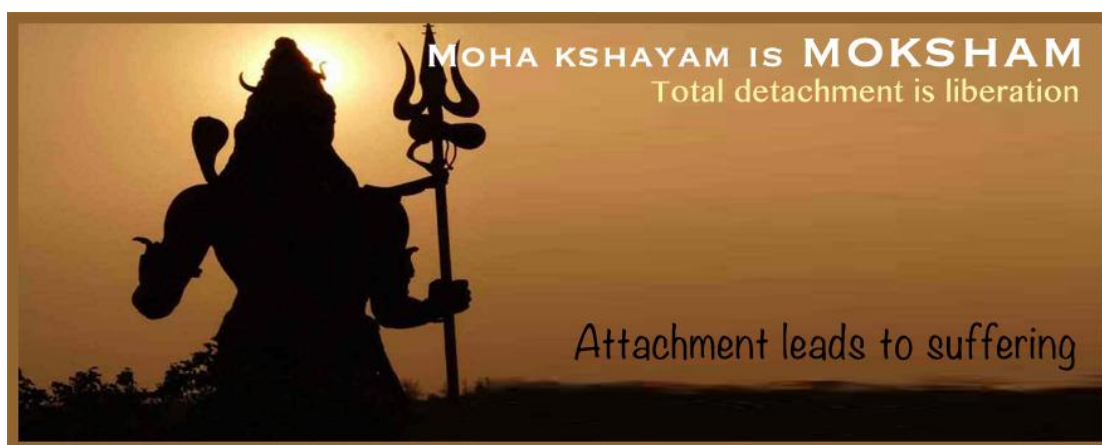
— 1999年シヴァラートリの御講話

この物語を読んで、思い浮かんだのは次のことです。

神が、神への愛を通して私たちに鼓舞するすべてのことは、その「私」を捨てることである！

私たちは、とても多くのものを神に捧げる覚悟があります。食べ物、水、快適さという犠牲を払う覚悟があります。しかし、このエゴ、非常に大切に自分自身にしがみついている「私」というものを、果たして捨てる覚悟はあるでしょうか？ この物語は、私たちが自分自身を捨てるやいなや、神が現れ、あらゆる点で私たちに健全にしてくれることを示しています。

実際、上記の引用した同じ御講話のなかで、スワミは、執着として現れているこのエゴを捨てることが解脱への唯一の道である、と言及されています。



今日、バジャン、慈善、奉仕がモークシャ(解脱)を授けると言いながら、それらの必要性を主張する人々がいます。自分の言っていることを本当に信じているなら、なぜ彼らは人に勧めることを実践しないのでしょうか？ 説教するのは簡単ですが、実践するのは難しいのです。モーハ クシャヤムがモークシャ(完全な無執着が解脱)です。執着は苦しみにつながります。ですから、第一に執着を捨てなさい。

—1999年シヴァラートリの御講話より

出典: [http://media.radiosai.org/journals/vol\\_11/01MAR13/Kannappa\\_shivarathri.htm](http://media.radiosai.org/journals/vol_11/01MAR13/Kannappa_shivarathri.htm)